



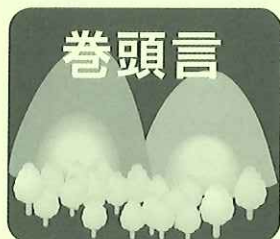
子ども樹木博士 ニュース

2021 - 12

No. 85

子ども樹木博士認定活動推進協議会

巻頭言



樹木の名前を知る楽しさを伝え続けるために

子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局

昨年からのコロナ禍の影響もあり、当協会が把握できた子ども樹木博士認定活動（以下「子ども樹木博士」という。）の実施回数が極端に減少してしまいました。昨年から今年にかけては、感染防止の観点から森林環境教育などのイベントすべての開催がままならなかったことから、子ども樹木博士の減少は避けられなかったところですが、今後、新型コロナウイルス感染症が収束し、ゼロコロナになるのか、ウィズコロナになるかはわかりませんが、再び子ども樹木博士が数多く行われることを期待しています。

子ども樹木博士認定活動推進協議会は、平成12（2000）年に活動を開始して、今年で21年目を迎えています。発足以来、プログラムの公開、標準的な認定基準の作成、認定証の配布等を通じて、子ども樹木博士の促進に取り組んできたところですが、コロナ禍以前においても近年、子ども樹木博士の実施回数は減少傾向で推移していました。これにはいくつかの要因があると思いますが、一つには、プログラムが平凡で毎回、繰り返し実施することにより、子ども樹木博士を企画・実施するリーダーたちの熱意が薄れてしまうことが要因としてあるのでないでしょうか。子ども樹木博士の開発者のお一人でもある木平東京農工大学名誉教授も本誌巻頭言（2017-6 No.67）で、リーダーの熱意の問題に触れ、子ども樹木博士プログラムの再考の必要性を提言されています。

森林環境教育の入門プログラムとして、樹木の名前

を知ることの楽しさ、覚えることの喜びを伝えるプログラムとしての基本を維持しつつ、「子ども樹木博士」というパッケージド・プログラムとしてバリエーションを増やしていくことが必要な時期に来ているのではないかと考えられます。

本誌「子ども樹木博士ニュース」でも「事例報告」のコーナーにおいてリーダーたちが工夫して実施したアクティビティが紹介されています。改めていくつかご紹介すると、本誌でもお馴染みの森林インストラクター岩谷美苗さんが考案したワークシートを活用した子ども樹木博士（2019-9 No.76、2019-12 No.77）、森林インストラクター会「愛」（現あいち森林インストラクター会）が企画・実施している「なぞとき樹木探偵」（2020-9 No.80）、広島市の森林インストラクター横田登美子さんたちが実施している樹木を対象とした「自然クイズラリー」（2020-12 No.81）などが挙げられます。

当協議会としても今後皆様方のご協力を得ながら、子ども樹木博士の新たなプログラムの開発、公開に取り組む必要があると見えます。皆様方のご意見をお聞かせください。

（子ども樹木博士のバックナンバーは、一般社団法人全国森林レクリエーション協会のホームページからご覧いただけます。

http://www.shinrinreku.jp/kodomo_nintei/index.php



【目次】

巻頭言	樹木の名前を知る楽しさを伝え続けるために	子ども樹木博士認定活動推進協議会 … 1
特集Ⅰ	植物の不思議 虫を呼ぶ葉の戦略	森林インストラクター 安樂 行雄 … 2
特集Ⅱ	観察会テンパリ日記(23)	森林インストラクター・樹木医 岩谷 美苗 … 3
事例報告	親子「子ども樹木博士」チャレンジ！2021	林野庁 関東森林管理局 福島森林管理署 森林整備官 大澤 宏二 … 4
シリーズⅠ	樹木名の話(23) —フユイチゴは時知らず—	森林植物研究家 埴田 宏 … 5
シリーズⅡ	東南アジアの木々たち(53) —雨で弾けるユニークな実—	自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史 … 6
子ども樹木博士質問コーナー(65)		(一社)日本森林インストラクター協会 会長 寺嶋 嘉春 … 7
事務局だより		8



植物の不思議 虫を呼ぶ葉の戦略

—ハンゲショウ・マタタビ・コンロンカー—



森林インストラクター 安樂 行雄

周りの植物を観察していると葉が白く変わる植物を見かけます。これは植物が交配するために虫を呼んでいるのだと聞いてきました。動かぬ植物の素晴らしい戦略だと思っていましたが、調べてみると諸説があり一定した見方は無いようです。分かる範囲でなぜ白く変化するのかを考えてみました。

●ハンゲショウ

湿り気が多い道端の溝の付近に生えており一種の匂いがあります。故郷（鹿児島県）ではどこでもという感じで観察できましたが、近頃は見かけることが少なくなりました。

花が咲くころになると穂状に伸びた花柄下の葉が半分白く変化します。この変化は、種子が実る9月ごろには元の緑色になります。また、「葉」と表現しましたが、詳しくは「苞葉」と言って花柄の下についている葉の一部分です。花をつけない茎にはこの白化現象は現れないそうです。

ハンゲショウの果実が実るころには、白くなった葉は元の緑色になりますので、受精のために虫を呼んでいることは間違いなさそうです。



●マタタビ

昔から、この果実は猫が特に反応することで有名です。果実は梨型の綺麗な形ですが、果実がある程度成長すると、虫がすぐに「虫嬰」（ちゅうえい）を作りますのでこぶこぶができて初めの姿はなくなります。果実のつき始めでないと正常な果実の形は観察できません。

マタタビは強壯剤としてマタタビ酒が作られますが、虫嬰のある果実でないと効果が少ないと一般的に言われています。

白くなる現象は上部の葉が特に白くなることが多いようです。白くなった葉の下には隠れるように小さな花がたくさん咲いています。確かに受精を助けてもらうために虫を呼んでいるように見えます。

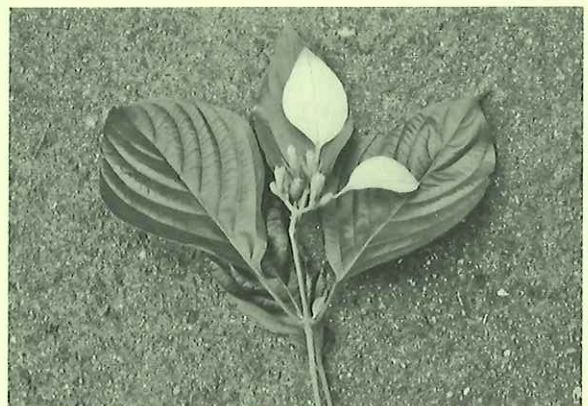


●コンロンカ

現物を1回見ると忘れることができないほど印象が強い植物です。株全体の緑色の中に鮮やかな真っ白の葉が目立っています。私たちが観察するコンロンカは灌木の状態で観察していますが「つる植物」と解説されています。私は蔓状のコンロンカは観察したことがありません。

白くなる葉は、葉の外側につく「愕裂片」（がくれつぺん）、いわゆる愕が1枚だけ大きく白く花弁状になっているのです。

雌雄異株ですが花の形が同じですから、交配のために虫を呼んでいるのに間違いないように思えます。



特集Ⅱ



観察会テンパリ日記 (23)



森林インストラクター・樹木医 岩谷 美苗

観察会をやっていて、樹種がわからないことがどうしてもあります。そんな時、最近はスマホで調べる人が出てきました。調べてもらえるから良いんだけど、「これ違うんじゃないですか？こっちじゃないですか？」と言われると辛いです。私が言ったのが明らかに間違っていると気まづくなります。

私もちょっとやってみよう、と植物を同定するアプリについて調べてみました。人気のアプリはピクチャーデイス、あと、グーグルレンズというアプリがあります。グーグルレンズは、撮った写真に似ているサイトを上げてくれます。植物以外を撮っても似たものが出るので、「この商品どこで売ってるの？」とかも調べられます。

ピクチャーデイスは木本も草本もキノコまで出てきます。でもキノコは注意書きが出てきます。キノコは見かけでわからないことが多いですから、うのみは危険です。ピクチャーデイスは有料ですが、お試し期間は無料で使えます。なかなかよくできていて、葉の形に個性があるものは得意で瞬時に結果が出ます。ミカンの品種まではさすがに無理でしたが、あっているかどうかをリターンできて、どんどん精度が上がっている感じです。AIがくじけず提案するから、こっちも育てたくなっちゃうんですね。解説が直訳すぎて、「植物を知らないあなたにぴったり」とか書かれていて笑っちゃいます。

私は「聞かれてわからない時は、これに頼ってしまおう。どんな仲間かだけでもわかればいいんだし、その場でわかるとうれしいし！」と、大船に乗ったつもりでいました。しかし、この前、青梅で観察したとき、肝心の電波が通じません。アプリが使えないという、思いもよらぬ落とし穴でした。東京でも場所により電波が届かないところがあるので、頼りすぎはよくないです。

アプリで瞬時に分かると覚える必要がなくなっちゃいますよね。「もう覚えなくてもいいじゃん。」と、植物を覚えるニーズは無くなるかもしれません。

そもそも、こっちが一方的に植物を教える時代じゃないかもしれないです。AIを取り入れつつ植物を楽しまないと、やばいかも？観察会は、みんなで植物を囲んで情報交換的な会になるのかもしれない。



事例 報告

親子「子ども樹木博士」 チャレンジ！ 2021



林野庁 関東森林管理局 福島森林管理署 森林整備官 大澤 宏二

福島森林管理署では平成26年度から、福島民友新聞社との共催で福島市土湯温泉近くの国有林内において「自然に親しみ、樹木を理解し、森林の大切さを学ぶこと」を目的として樹木博士の認定試験を開催しており、今年で通算8回目のイベント実施となりました。

今年も、7月31日に「森で学ぼう 親子『子ども樹木博士』チャレンジ！2021」と銘打ち、新型コロナウイルスの感染症対策として少人数に班をわけ、16家族43名の参加者（内試験参加者25名）にて実施しました。

会場は森の中の遊歩道を選定しています。道沿いには約25種類の樹木があり、試験木に、樹皮や葉・使われる用途・匂いなど特徴のある樹木15種を選定しました。試験前の班ごとの勉強会では森林管理署の若手職員が中心となり、一つ一つ説明を行い、参加者は熱心にメモをとりながら試験に備えました。



特に樹皮が紙状に薄く剥がれるダケカンバ、小葉が鳥の羽のように生えているナナカマド、まだら模様で美しい樹皮を持つナツツバキには子どもたちだけでなく、保護者の方々も強い興味を引かれ、深く心に刻まれたようでした。

試験時間は45分！試験木を行ったり来たり、記憶を呼び起こすのに苦戦しながらも自分の力で問題に挑戦していました。



ナツツバキ

採点中の待ち時間に子どもたちは木工クラフトにも挑戦！木の写真立てや木製コースター作成に熱心に取り組む様子や、絵を描いたり、動物のスタンプを押したりして待ち時間も楽しく過ごしていました。



最後に福島森林管理署長から「子ども樹木博士」の認定書が参加者全員に授与され、嬉しそうに受け取っていました。子どもたちはもちろん、保護者からも「森の中でリラックスができた」、「夏だけど森は涼しくてよかった」、「子どもの夏休みの自由研究にも活用できた」と大好評でした。森林の中のちょっと涼しい感覚や木のぬくもりが体験できた参加者皆様の楽しい一日となったようです。

この環境教育プログラムは、我々森林管理署の職員にとっても市民の皆様と直接交流できる数少ない機会ですので、これからも継続していき、国有林、森林の魅力をPRしていきたいと考えております。

シリーズⅠ

樹木名の話 (23)
—フユイチゴは時知らず—

森林植物研究家 埴田 宏

冬でもイチゴ摘みができます。温室栽培のオランダイチゴではなく、野生のフユイチゴです。残念な点は、新潟県、千葉県以西の暖温帯に限られること。ブナ帯にまで生育するミヤマフユイチゴでも分布域は北関東まで、北日本には分布していません。

フユイチゴは、スギ林の林縁などで、やや湿り気のある土壤に生育しています。大きな円い葉の間から、小さな赤い実が見つければ、山からのご褒美。子どもでも紙コップ片手に集められます。春に実るクサイチゴに比べればちょっと小さめですが、一粒は大きく、やや酸味のきいた濃い味がうれしい。粒の中にはタネがあるので、口の中でより分け、プツと吹き飛ばします。幼児には難しいかもしれませんが、飲み込んでも害はないでしょう。

冬に食べるイチゴだからフユイチゴ、実にわかり易い名付け方です。ところが、図鑑でフユの付く名を探すと、フユザンショウ、フユザクラなど、果実を食べないものばかり見つかります。

私たちは植物と相談しないまま、勝手に「標準仕様」を決めています。そして、標準から外れたものには、それを強調する名を付けてきました。



フユイチゴの果実は11月から1月頃に食べられる



フユイチゴの花は秋に咲く

サクラの花は春、春を待ちきれないものはフユザクラとか、カンザクラと呼ばれます。サンショウは葉が命ですが、冬には葉がありません。だから、冬に葉がある常緑の種類はフユザンショウとなります。小粒でピリリと辛い実のことは忘れてください。

フユイチゴの別名はカンイチゴ、またはトキシラズ。フユザクラにも同じ様な別名があります。「時知らず」の呼び方は、季節外れを上品に表現する古語です。

基本名であるイチゴの語源については、よく分かりません。大言海には、「語源は不明だが、イチビコが略されたものではないか」とあります。イチビコの名は、日本書紀の雄略天皇の話に、蓬蘽丘（いちびこのおか）という地名として出てきます。江戸時代の倭訓栞では、蓬蘽をイチビコと読み、フユイチゴとしています。しかし、現代中国の図鑑によると、この漢名はクサイチゴにあてられ、フユイチゴは寒莓となっているので、漢名の認識に混乱があったようです。

和名の以知古（イチゴ）が定着したのは、平安時代中期の本草和名から。江戸時代中期になると、和爾雅や和漢三才図会などの書物でイチゴ類の分類と漢名との対応が説明されています。

シリーズⅡ

東南アジアの木々たち (53)

—雨で弾けるユニークな実—

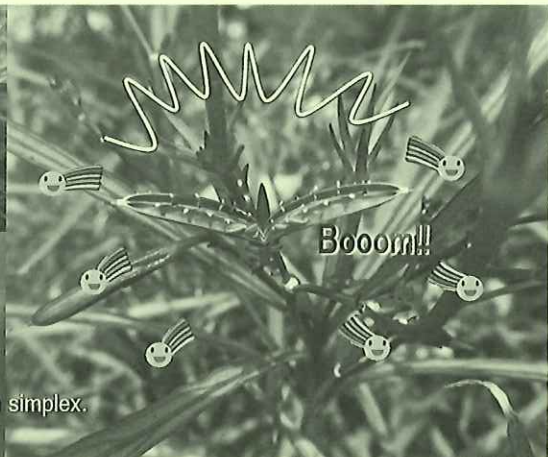


自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史

各地では真っ赤な紅葉や菊花展の季節を迎え、国内のコロナ感染者数も、ようやく大幅に減りました。内心ほっ…としております。

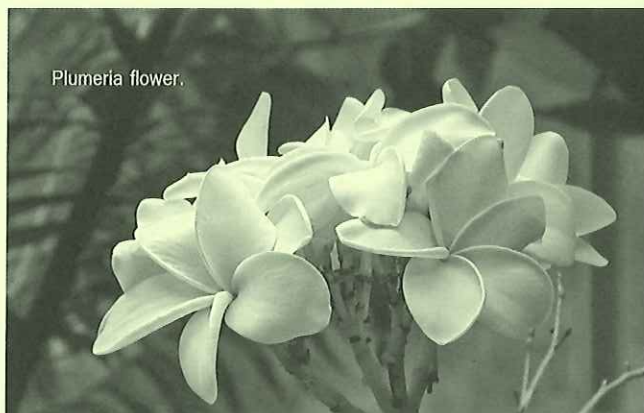
ただ、ウイルス感染症の研究者からは、「第6波」への警戒の声も聞こえ始めています。まだ、決して油断しない事が大切ですね。なお、ドイツや英国では、

ワクチンを接種した人が感染してしまう「ブレイクスルー感染」が、かなりの勢いで拡大しています。感染者の症状を見ると、以前のように重症化する患者さんは減っている印象です。日本だけでなく世界の状況も注視して過ごしましょうね。



さて、今回の南国の植物は、ユニークな特徴を持つ草本「柳葉ルイラ草」をご紹介します。この夏、タイに住む方々がSNS上でこの花の画像をよくUPされ、現地では随分と愛されている様でした。実は私の住む地域の道端でも見かける雑草なのです。元々はメキシ

コ、南米が原産地で、近縁種と共に世界中に帰化しています。長細い実（莢）が雨にぬれると炸裂して種子を飛ばします。以前、傍で眺めていたら突然爆発したので、超ビックリした記憶があります。(ˆoˆ;)



属名は *Ruellia*。フランスの植物学者で医学・薬学の研究に努めたパリ大学の教授ジャン・リュエル(1474~1537年)の功績を称え、与えられた献名です。命名者は、同じくフランスの植物学者で南米の探検調

査に従事したシャルル・プリュミエ(1646~1704年)。南国を代表する花木プルメリアは、このプリュミエの名に因んでいます。この花たちに出会ったら、お二人の事も思い出してみてくださいね。

子ども樹木博士質問コーナー(65)

一般社団法人日本森林インストラクター協会 会長 寺嶋 嘉春



Q クリスマスツリーに使われる木について教えてください。

A ○クリスマスツリーの起源
ヨーロッパやアメリカでは、クリスマスは、キリスト生誕（降誕：こうたん）のお祭りですが、クリスマスツリーの起源はキリスト教とは関係なく、ヨーロッパの北部に伝わる、古代ゲルマン人の「ユール」という冬至の日のお祭りに使われる木（樅の木）だとされています。

冬至は、この日を境に太陽が強さを増していくことから、1年の始まりを祝うお祭りの日でした。寒い冬でも青々とした葉をつけている木がそのシンボルとされたのです。

クリスマスツリーとしては、飾りつけをするのに適した、形が良く冬でも葉をつけているモミの木のような常緑針葉樹が使われるようになったのだと考えられます。

○ヨーロッパのクリスマスツリーの樹種

クリスマスツリーとして使われる木としては、ヨーロッパでは、ヨーロッパモミが使われてきましたが、手に入りやすいドイツウヒが使われるようになりました。ドイツのシュバルツバルトは、ドイツウヒの森です。ドイツウヒは、葉が針のように細くとがっているトウヒの仲間です。モミの仲間は葉が平べったい形です。

ヨーロッパのクリスマスツリーは、根元を切ったものを使うため、ドイツウヒは葉が落ちやすいため、近年はコーカサスモミやノーブルモミなどが使われているとのことです。

○日本のクリスマスツリーの樹種

日本のクリスマスツリーも、ドイツウヒがよく使われていましたが、近年は、ウラジロモミ、エゾマツ、トドマツなどが使われています。

ヨーロッパやアメリカでは、たくさんのクリスマスツリーが飾られます。クリスマスツリーに使う木は、専用の農地に植えて生産されます。

一方、日本のクリスマスツリーの樹種は、どうでしょうか？ドイツウヒは、日本では、北海道や東北地方の

寒くて雪が降る地方で、鉄道沿いや家の周りに植えられました。寒さに強く、防雪林として、たくさん植えられ、苗木が生産されて手に入りやすい樹種でした。



新潟県妙高高原のドイツトウヒ林

戦後は、山にスギやヒノキがたくさん植えられましたが、標高が高く寒冷な土地や北海道などでは、寒さに強いウラジロモミやトドマツ、エゾマツが植えられます。日本のクリスマスツリーの樹種もモミやトウヒの仲間ですが、林業用の樹種などが流用されたともいえます。エゾマツはトウヒの仲間です。

クリスマスツリーを見たら、葉を観察して、どんな樹種か確かめてみてくださいね。



ウラジロモミ



エゾマツ



トドマツ



モミ

